

k i z i n d ō
鬼 神 堂 遺 跡

- 確認調査 -

1991. 12

長野県飯山市教育委員会

はじめに

飯山市木島地区は、昭和57年の樽川堤防決壊による洪水でも知られているように、樽川や千曲川の氾濫によって常に水害を受けてきた。木島地区の歴史は、水との戦いの歴史であったといっても過言ではない。しかし、一方で肥沃な沖積地で豊かな穀物の恵みも受けてきたことも事実である。木島の平は飯山市では、常盤平・外様平と並ぶ最大の穀倉地帯となっている。

この木島地区における遺跡＝埋蔵文化財は、山麓の安田、吉、基綿、山岸各地区のみで散在的に知られているに過ぎなく、自然堤防上に立地する下木島、天神堂、野坂田等の集落周辺においては、洪水常襲地帯という先入観もあって埋蔵文化財の存在については問われることがなかった。ただし、中世はもちろん古代においても重要な地域であったと推定されることは、すでに金井喜久一郎先生や佐藤政男先生等により指摘されているとおりである。

最近になり金井喜久一郎先生が、かつて下木島の鳥出神社の近くより出土した珠洲系陶器をお持ちになり、確認のための発掘を要請された。市の教育委員会ではちょうど飯山市誌の編纂中でもあり、木島地区の歴史を解明するにも重要であるとの認識から急速確認調査を実施することとなった。

発掘記録

- 1 所在地 飯山市大字下木島字鬼神堂
2 土地所有者 箕口安一氏
3 調査期日 平成3年(1991年)10月28~29日
4 指導者 金井喜久一郎(飯山市誌編纂委員会顧問)
高橋 桂 (日本考古学協会会員)
5 担当者 望月静雄 (飯山市教育委員会)
6 参加者 常田利夫・丸山三二(以上奈良沢)・樋山巖・竹内大五郎・
北条辰男(以上戸狩)・吉田忠彦(其綿)
7 成果 遺構 石組遺構
遺物 中世 珠洲系陶器・越前系陶器・瓦器・青磁・茶臼等
8 本書の作成は、飯山市教育委員会事務局が行った。

教育委員会事務局

- 教育長 岩崎彌
教育次長 佐藤清
社会教育係長 渡辺博
同市誌担当 今清水豊治

埋文センター

- 整理作業 小林みさを・北山けさえ
事務担当 樋山二二子

I 鬼神堂遺跡の周辺

A 遺跡の位置と環境

遺跡は、長野県飯山市大字下木島字鬼神堂に所在する。甲信国境に源を発する千曲川が信濃に残す最後の平地が飯山盆地である。盆地底のほぼ中央を流れる千曲川は、東西に広い沖積地を形成する。このうち東側を木島平と呼称している。木島平は飯山市木島地区が大半を占め、さらに東側の上信を分かつ毛無山麓に発達した扇状地上には、下高井郡木島平村が位置する。木島地区は、南側に善光寺平と分かつ高社山の裾野に位置する安田・吉・其綿・山岸の各地区と、中央の自然堤防上に立地する上新田・野坂田・坂井・下木島・天神堂の地区とに分けられる。

遺跡は、自然堤防上の下木島地区に位置する。標高312mのほぼ平坦な地形であるが北側は、自然堤防の端部となり、約1mの段差がある。遺跡の西約100mには、県天然記念物の指定を受けている鳥出神社の大ケヤキが存在し、鳥出神社の正面を望むことができる。

B 歴史的環境

当地区的歴史的環境については、佐藤政男氏が『飯山の歴史と自然』（昭和49年 飯山市）の「天然記念物鳥出神社の大ケヤキ」の項で古代・中世を概観している。引用しながら触れることとする。下木島由来記によれば「永享元年八月、小笠原持長が泉持重を泉城に襲い所どころに火を放つ、当時國中紛争絶えざるの時なり。この時に当り、鬼神堂も亦兵火にかかり鳥有に帰したり。後その堂宇の跡に現今の社殿を創立したり。山界万靈塔は焼石のまま今尚社殿の床下にあり、里人と殿宇建立の際記念として一折を植う。周囲二丈余、人皆境内の御神木という。」とある。また、天神堂大沢社家の古記録では、「南北朝時代、北朝ノ後円融天皇の康暦二年、社地に山城国男山八幡大神宮を奉遷し、櫛を御神木と定めて社を創立す」とあるという。永享元年は1429年、康暦二年は1380年である。すでにこの頃大ケヤキは御神木として存在していたのであろう。また、「鳥出の郷」とよばれたのはトリデ（砦）すなわち柵の意味で、木島も「柵島」の転用であろうとしている。これは、古代大和朝廷の北方進出の前戦基地であった柵の島であったとの推定に基づいている。このように当地域には、古代・中世において重要な

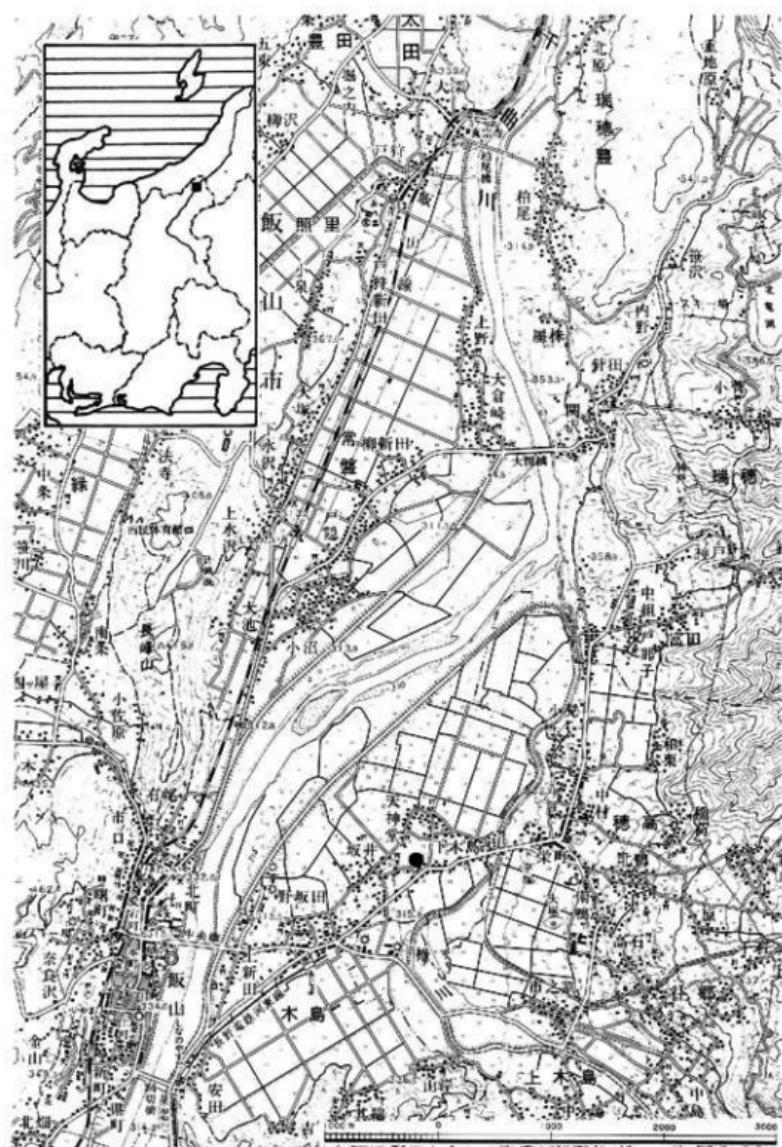


図1 鬼神堂遺跡の位置（1：50,000）

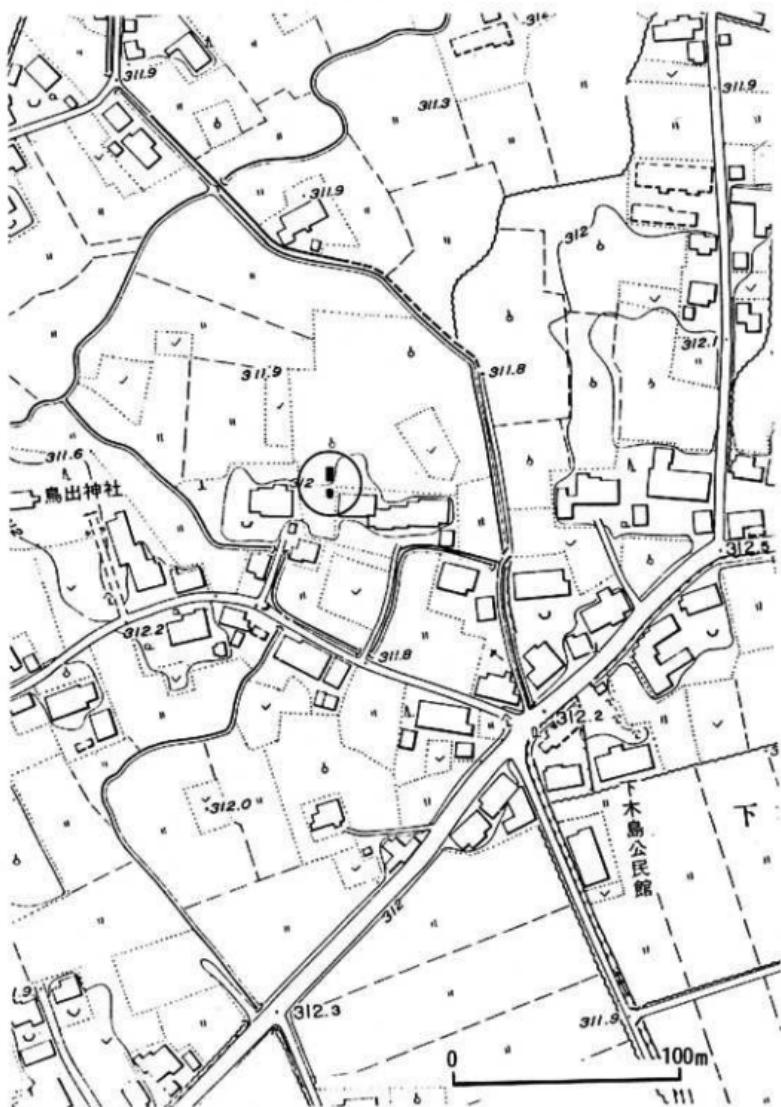


図2 遺跡周辺の微地形（1 : 2,500）

な地域であったと推定されているが、埋蔵文化財包蔵地として周知されている遺跡は今まで確認されていなかった。

II 調査の経過と方法

A 経過

1 経過

『はじめに』の項でも触れたとおり、平成3年7月、金井喜久一郎先生より2点の陶器片を提示された。それはまさしく珠洲系陶器の壺破片であり、『壺T種』と呼称されているタタキ縞の典型的なものであった。先生によれば、地主がリゾート植栽の折地下を背の丈位掘ったところ、まとまって破片が出土したとのことであった。昭和30年代のことであり大半が散逸したとのことであるが、提示された2点の陶器片は同一固体であり、もともとは一固体分を掘り出した可能性が高い。示された場所は周知の埋蔵文化財包蔵地としては一切確認されていなかった場所であり、むしろかつては非居住区域として考えられていた場所であった。このことから、飯山市誌を編纂するにあたって、古代・中世を担当された金井先生は、古代及び中世の木島を知るうえで欠かせない事実であるので是非確認のための調査を実施してほしい旨の要望を示された。教育委員会では、市内各地で埋蔵文化財の緊急発掘を実施中であるので直ちに実施できないが、調査が終了する秋以降実施する方向で進めることとした。

平成3年10月初旬、地主の箕口安一氏に承諾を得るとともに調査の準備を進めた。天候の都合により着手口が遅れたが、10月28・29日両日発掘調査を実施し、遺物、遺構を確認し遺跡地であることを再確認した。

2 調査日誌

1991.10.28(月) 曇り 薄曇りであったが、この時期にしては暖かい。地主の箕口氏の記憶により、任意にトレンチを設定。表土は20センチ、その下位80センチ褐色土(氾濫土砂)さらにその下位に20センチの黒褐色土がある。微小ながら遺物出土。午後北にさらに拡張する。表土より140センチ下位から越前系陶器、石組出土。茶臼様の石製品がトレンチ北端より出土。ピット状の落ち込みも確認さ

れたため、一日間の予定であったが翌日も続行することとした。

1991.10.29 (火) 晴

気持の良い天気となる。昨日出土した石組箇所を拡張する。周辺より珠洲系陶器破片出土。確認調査のため石組については実測図作成のみと考えたが、石組の下位を確認するため二・三の石について除去する。その結果、石組を含めて全体が竪穴状になることが判明した。遺構を確認する目的が達成されたので、その状態のまま埋め戻しをすることとし、薄暗くなった5時15分までかかって終了した。

3 層序

本地区における標準層序は第2図のとおりである。

1層 表土（耕作土） 暗褐色土（～20cm）

2層 褐色土（80cm） 河川氾濫に伴う砂を多く含む。

3層 黒褐色土（20cm） やや締まった層で砂は少ない。

4層 茶褐色土（20cm～） 2層より多量に砂を含む。

このうち、中世の遺物は3層黒褐色土の下位、4層からの出土である。3層からも多少の遺物は発見されているが、近世のものかもしえない。したがって、中世の包含層は4層と考えられ、表土より140cm下位にある。なおその下位、古代の生活面の存否については、手作業で確認することは出来なかった。

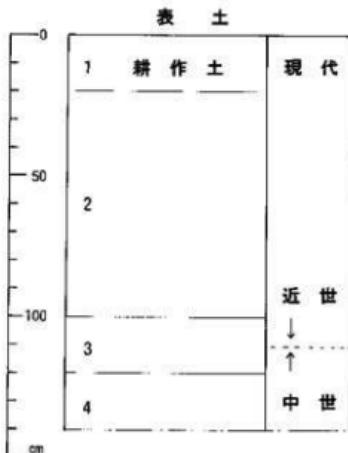


図3 標準層序 (1:20)

III 調査

A 調査区

調査箇所は、かつて出土したとされている地点を再度調査することとした。（図4）当時の発見者である地主の箕口氏にも立ち会っていただいたが、共同井戸の北側であったことは明確であるが、それ以上の詳細についてははっきりと覚えていないとのことであった。発掘は10平米を予定して、井戸の北側を任意に発掘することとした。また、自然堤防上であるためかなりの堆積があると予想したが、調査地区まで重機が進入することが出来ないと予想されたため、表土より人力で行うこととした。

B 遺構

石組遺構

第2調査区において石組遺構が検出されている（図5）。周辺より中世陶磁器が出土しているので本遺構も中世の所産と考えられる。大小16個の石で構成される。そのうちの大きな石5個を中心とした石がコの字状に石組の形態を呈している。検出面は4層の上面より約20cm下位であり、ほぼ同一レベルで並ぶ。炭化物も石組周辺からかなり確認されたが、焼土は認められなかった。最終調査では、石組を中心として落ち込みが確認されたが、調査目的の関係上確認したにとどめた。また、かつて発見された株洲系陶器は、石がまとまっている所から出土し炭も多く出たとの話であり今回の石組がその可能性がある。

柱穴

第2調査区の北端に5本、石組の西側で2本検出された（図6）。いずれも4層内よりの検出であり、3層下面では確認できなかった。南側の2基の柱穴は、石組遺構の落ち込みより外にあるものと思われる。建物に関係するものかどうか不明である。柱穴内より遺物は出土しなかったが、石組遺構と同一レベルからの検出であり、時期も同様に中世と考えられよう。

なお、第1調査区でも1本検出されている。



図4 調査区 (1 : 200)

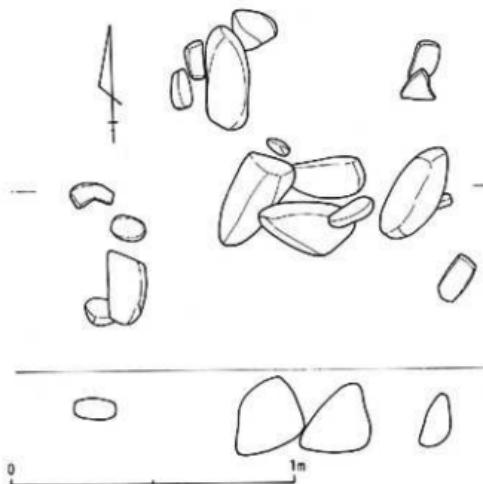


図5 石組遺構平面図 (1 : 20)

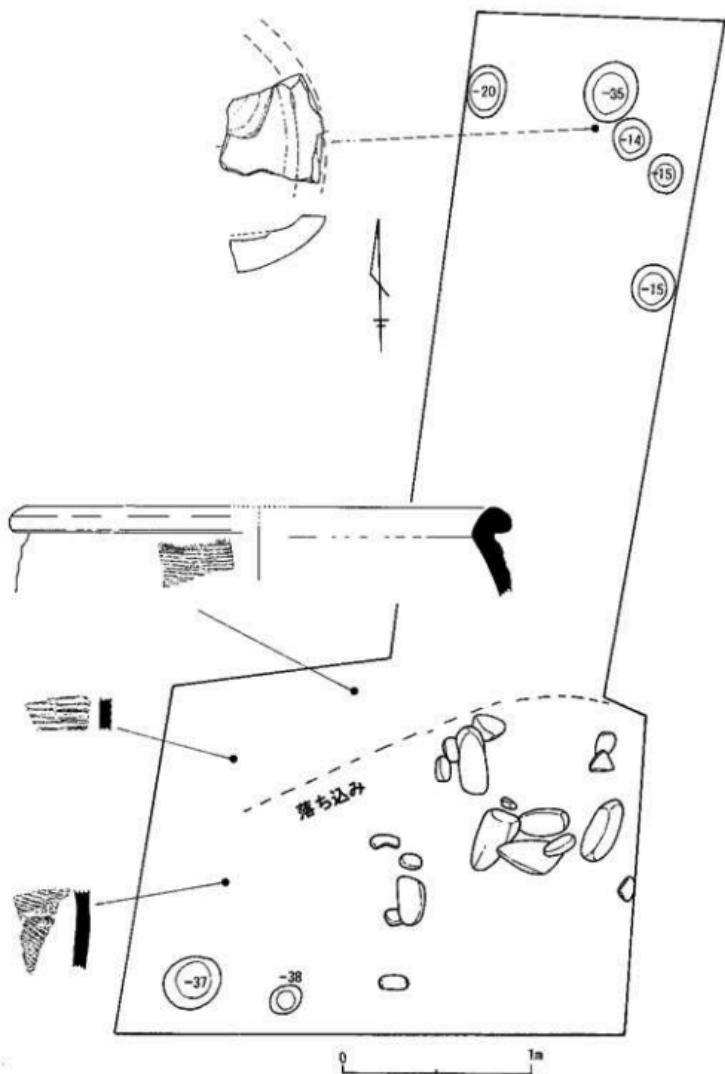


図6 第2調査区遺構平面図（1:30）

C 出土遺物

出土遺物は総数10である。内訳は中世陶磁器8点、近世陶器1点、石製品の茶臼片1点である。(図7)。また、かつて出土した2点もあわせて報告する。

1 珠洲系陶器 壺 珠洲焼は、能登半島珠洲郡市付近において、平安時代の須恵器の技術をそのまま受け継ぎ還元炎焼成を行った中世古窯の一つである。本例は石組の西側に接して出土したものである。口縁部分の小片であるが図上復元を行った。口縁部がくの字状に屈曲し、やや肥大する口唇部をもつ。面取りはなされておらず、丸みをもつ。表面は叩目が、裏面には円形押圧具痕をとどめている。色調は灰色で、表面には自然釉が薄くかかる。珠洲IV期、14世紀代。

2 越前系陶器 壺(注1) 越前系陶器は、平安時代の瓷器(灰釉陶器)の系統を引く窯で福井(越前)で焼かれた中世陶器である。本例も口縁部の小片である。折り返しの口唇部をもち、ほぼ水平な端部となっている。裏面は一段の段差をもって口唇部との区画を行っている。胎土には白色の微小な石を多く含んでいる。焼成によって自然釉がかかり全体的に褐色に近い色調となっているが、素地は灰白色である。4層、石組付近より出土。

3・4 珠洲系陶器 壺 今回の調査の契機となった陶器である。同一固体の壺胴部破片で、表面は叩目、裏面には円形の押し当て痕がのこる。色調は青灰色である。(昭和30年代出土品)

5・6 珠洲系陶器 壺 3・4と同様の胴部破片である。石組遺構の周辺より出土している。5はやや明るい褐色を呈し、6は青灰色を呈す。

7 珠洲系陶器 鉢 内面に叩目が施された摺鉢である。底部にいたる胴部破片で、色調は表面が灰褐色、内面が灰白色である。叩目は幅3cmに20本が細密に施されているが、磨耗しているためにはっきりしない。調査区北側、ピット周辺から出土した。

8 瓦質土器 須恵器系土器の軟化した黒色の中世土器である。本例はおそらく火鉢類と考えられる。器表面には、菊花文様のスタンプが押印されている。色調は黒色で、胎土は橙褐色を呈す。4層、石組付近出土。

9 青磁 花瓶 花瓶頸部の破片と思われる。薄い青緑色の釉がかかった青磁である。輸入磁器と考えられる。

10 青磁 碗 ほとんど直線的に口縁部に至る碗の破片である。内面に紋様が認められる。色調は灰緑色、貫入がある。

11 美濃窯 碗 近世初期のものと思われる。底部内面側には薄緑色の釉がかかっているが、外面は白乳色の釉が流れていく。胎色は薄茶色。

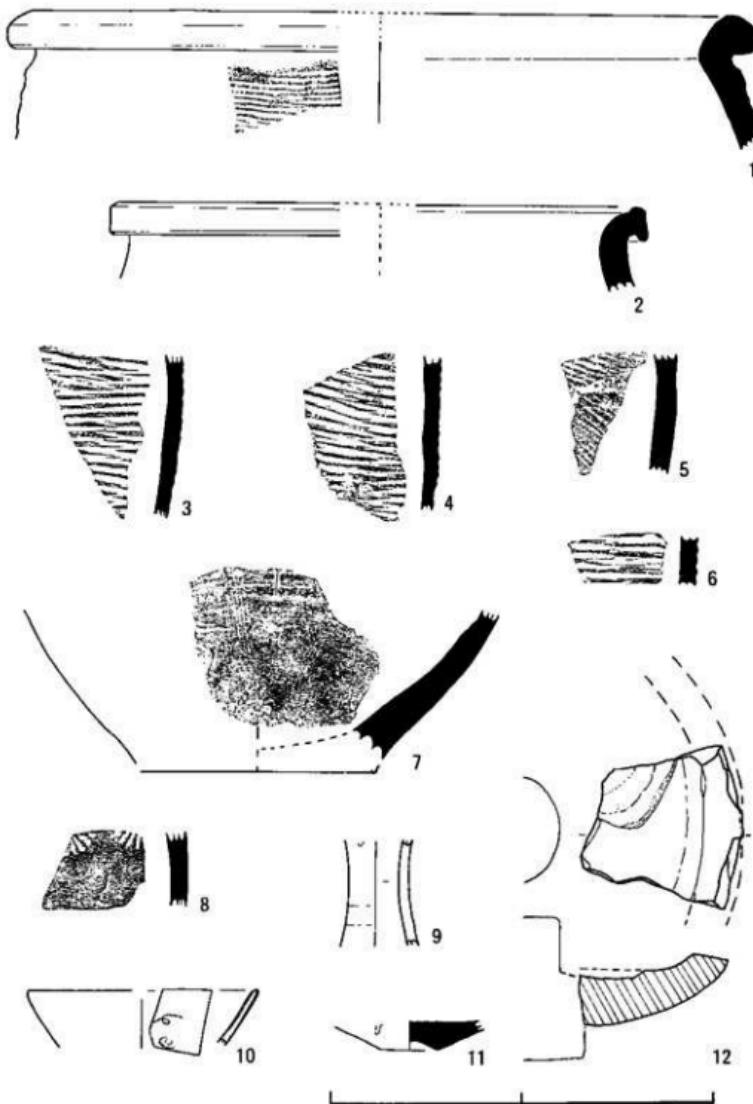


図7 出土遺物実測図 (1:3) 1・3~7 珠洲系陶器
8 瓦質土器 9・10 青磁 11瀬戸・美濃 12茶臼

12 石製品 茶臼 下臼の破片である。外面は凹凸があるが、内面は外周の面取りなど丁寧に磨かれている。安山岩系統の石質である。調査区の北端ピット付近より出土している。

遺物について

少量・微小破片ではあったが特徴的な資料であり、編年的にはおよそその年代が与えられる。まず珠洲系陶器については、甕の口縁形態がくの字状に外反し、やや肥大しながら丸みをもった口縁形態は、珠洲IV期、14世紀代の特徴と思われる。越前系陶器壺はN字状口縁の名残をとどめている点などから、やはり14世紀に位置付けられよう。また、瓦質土器・青磁は14世紀代あるいは15世紀前半まで下がるかもしれない。

以上の点から遺物群はほぼ一時期の所産と考えられ、14世紀代から15世紀前半を中心とした年代と思われる。

(注1) 当初常滑系と考えたが、胎土・色調から越前系陶器として報告する。

N まとめ

今回の調査は、一つには埋蔵文化財包蔵地の確認という基本目標があった。昭和30年代に発見された遺物が2点現存しており、また、発見した方も検出した地点をほぼ覚えておられたので、その存否については疑う余地のないところであったが、再確認する必要性があった。

一方、中世の遺跡地であったとしたらどういう性格の遺跡であるのか、さらに古代木島についても追及できる可能性がないだろうかという期待もあった。文献等の調査で古代・中世の木島が重要な位置を占めたであろうと推定されることは、すでにI-B歴史的環境で触れてきたとおりである。

調査によって中世の遺跡が存在することが明らかとなった。遺跡の内容・性格については小面積のため明確にはならなかったが、鳥出神社の東100mの地点で発見された意義は大きなものがあると考える。遺物は少量であったが、中国青磁や茶臼片などの出土は遺跡の性格を考えるうえで貴重な資料となろう。なお、重機が入れない関係ですべて手作業で進めたが、面積的な制約もあって深度140cmが精一杯であった。古代の探索についてはさらに100cm以上の調査が必要と思われる。今回は上記の理由で断念したが、当地区周辺はかなり早くから開拓が進んだと推定され、古代遺跡も営まれたであろうと思われる。近い将来そうした文献史料との接点を見出せる遺跡が確認されると思われる。

いずれにしても、沖積地木島の平において遺跡が確認された意義は大きく、市

の埋蔵文化財保護についても今後新たな対応が問われることになる。

最後に今回の調査を実施するにあたり、調査を快諾してくださった地主の箕口安一氏、調査区隣接の高橋東一氏に厚く御礼を申し上げたい。また、調査の実際を行っていただいた作業参加者には、大変お骨折りをいただいた。あわせて御礼申し上げる。

引用・参考文献

- 1 飯山市教育委員会 1971 「長野県天然記念物鳥出神社の大ケヤキ」『飯山の文化財』
- 2 飯山市 1974 「天然記念物鳥出神社の大ケヤキ」『飯山の歴史と自然』
- 3 福井県陶芸館 1986 『越前名陶展』
- 4 吉岡康暢 1989 「北東日本海域における中世陶磁の流通」『国立歴史民俗博物館研究報告 第19集』



写真 1 鬼神堂遺跡近景



写真 2 第1調査地点調査風景



写真3 第2調査地点調査風景



写真4 第2調査区調査風景



写真5 第2調査地点出土 石組

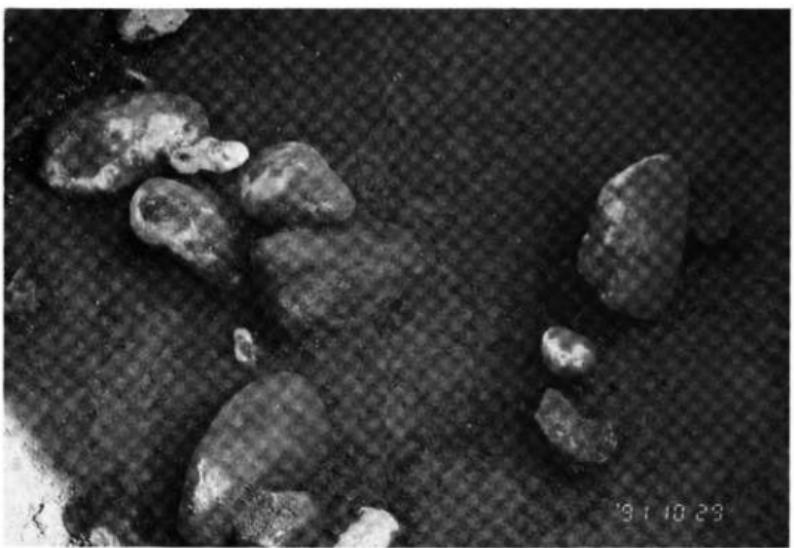


写真6 石組

写真7 珠洲系陶器 壺



写真8 珠洲系陶器 壺

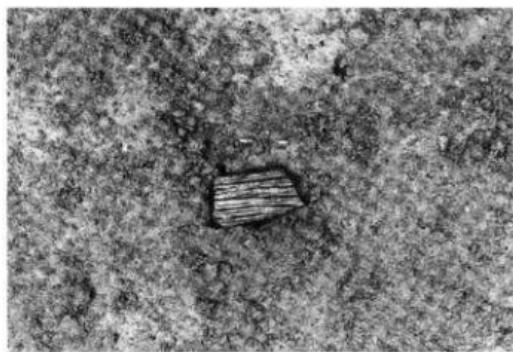


写真9 珠洲系陶器 壺





上 (左から) 珠洲系陶器鉢・越前系陶器・珠洲系陶器壺
中 (右から) 瓦質土器火鉢・珠洲系陶器壺(3点)
下 (右から) 石製茶臼・美濃焼・青磁(2点)

飯山市埋蔵文化財調査報告 第29集
鬼神堂遺跡 確認調査－
平成3年12月2日
編集・発行 飯山市教育委員会
長野県飯山市大字飯山 1110-1
印 刷 (有)足立印刷所